

鉄と虎.....

日本の「宝島」岩手・釜石に行く

その1

寄稿 POSCO人材開発院教授 **李寧熙**さん

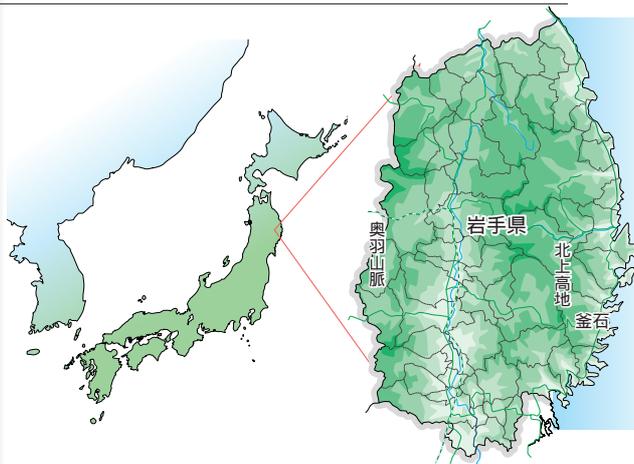
本年5月、POSCO人材開発院教授李寧熙さんが釜石市など岩手県各地を訪問された。李さんのライフワークともいえる「韓国と日本の鉄の古代交流史」のテーマを探索する活動の一環だ。これまでも、島根県（出雲）、愛知県などを訪問され、調査の結果を発表されてきた李さんは、「釜石に伝わる虎舞」に大きな関心を寄せられた。昨年10月、「POSCOとの戦略提携特集」取材で表敬訪問した際、今回の企画が具体的に提案され、地元関係者のご協力も得て実現した。本号では、李さんからの寄稿を紹介する。



岩手県立博物館にて、岩手山を背景に李さん

李寧熙 イ・ヨンヒ

東京生まれ。1944年父母と祖国韓国に帰る。梨花女子大学英文科卒。韓国日報文化部長、国会議員、公演倫理委員会委員長、韓国女性文学人会会長などを歴任し、現在POSCO人材開発院教授。「大韓民国児童文学賞」「大韓民国教育文化賞」「馬海松童話賞」「小泉文学賞」など受賞。日本における著書に『もう一つの万葉集』（文藝春秋）『日本語の真相』（文藝春秋）『もうひとりの写楽』（河出書房新社）など8冊がある。また李寧熙さんが責任編集している後援会会報『まなほ』が定期刊行されている。



日本の「宝島」岩手県

岩手県は日本の「宝島」だ。

「近世鉱山図」（森嘉兵衛・千葉房夫氏らによる）は、東部の北上高地と西部の奥羽山脈の北から南にかけて、金・銀・銅・鉄・琥珀の産地をびっしり記している。海岸沿いからも鉄・金が採れ、製鉄に欠かせない石灰まである。これで鉄作りをしないはずがない。岩手県は古代から現代に至るまで、名だたる「島」ならぬシマ（古代韓国語で「鉄（シ）の間（マ）」の意）こと「製鉄の地」なのだ。

韓国と日本の鉄の古代交流史を追究し始め、岩手県の釜石市から採れるという「餅鉄」（べんてつ・もちてつとも）の存在に強く惹かれた。

川原に転がっている黒く光沢のある石。焼くと脆くなり、女性の力でも簡単に砕くことができ、製鉄に使用してきたという。この地域の古代製鉄では、砂鉄と並ぶ重要な原料であった。

虎がないのになぜ虎舞が？

ともかく釜石に行って、その石を見届けねばと臍を固め、遂に釜石行きが実現した。

釜石には「虎舞」なる伝統芸能もあるという。生態的に虎のいない日本の、しかも東北地方に、なぜ虎舞があるのか？

虎をトーテム（totem、部族集団にとって神秘的、象徴的な自然界の事物）として崇めてきた、韓国系の一部族滅（エ）（日本では「や」と呼ばれ、八・夜・矢などの漢字で表されていた古来の渡来人）と関連する祭儀の一種ではないか。胸が騒いだ。

滅は、豹（メク、熊をトーテムとしていて日本では



餅鉄を手にした李さん
(釜石市郷土資料館にて、説明者は釜石市教育委員会
文化財調査員森一欽氏)



「こま」と呼ばれた)と共に上・古代の韓民族を形成した二大部族である。滅人たちは、早い時期から、製鉄・造船・航海などのハイテク技術をたずさえて日本に渡り、原野を拓いていた。

韓国の史書『三国遺事』(高麗の僧一然著・十三世紀成立)の冒頭「古朝鮮」条に、この滅と狗に関する記述がある。

一つの穴に虎と熊が住んでいて、人間になりたいと願った。「よもぎとニンニクを食べ、百日間日を見なければ人間になれるだろう」という言いつけを守った熊は、人間の女になり、守れなかった虎は逃げた。熊女は天帝の子と結ばれ、生まれた子供が古朝鮮の始祖檀君になった……という神話である。この熊とは、熊をトーテムとする狗族のことで、虎は、同じく虎をトーテムとする滅族を表している。

狗は、かつての満州南部に高句麗国を建国、その高句麗から分派した百濟は半島を南下、現在のソウル・漢江のほとりに都を定める。紀元前一世紀のことである。

一方、滅の根拠地は、今の中国北東部黒竜江べりおよび北朝鮮白頭山付近の鉄鉾山茂山(現在に至るまで磁鉄鉾を産出する)や、豆満江べりの地域だったと思われる。

かたや新羅は、一足先に韓半島東南部で国を開き、早くから製鉄に力を入れていた。

滅が、韓半島北東部の今の江陵を中心とする江原道一帯にやって来たのは、一世紀。鉄国または滅国と呼ばれ、新羅同様、製鉄・鍛冶でならした国である。江陵北部の襄陽には、韓半島南部最大の、7キロに至る磁鉄鉾の鉾脈が今もある。

滅系の韓国人は、早くから日本列島に渡っていた。韓半島南部から出雲一帯や九州北部を経て、本州にまで進出、日本の土台作りに精を出したが、後からやってきた狗系の者たちに漸次征服されて行った。日本の国を生んだとされる伊耶那岐神と伊耶那美神も、この滅系である。

突然滅びた滅国の残存勢力は宝島日本へ

ところが、二世紀になると、滅国はなぜか突然滅びる。江原道の山から発源し、韓半島を東西に両断して流れる洛東江べりに、大伽耶などの伽耶諸国が滅人によって相次ぎ建国されるのも一世紀のことで、主導勢力がこれら伽耶に大移動したせいで衰退したのか、それとも、隣接する新羅によって滅ぼされたのかは明らかでない。

ともあれ、滅国の残存勢力は、江陵近隣の地から海を渡り、宝島日本へ行く。

海上保安庁の海流推測図によると、対馬暖流には三つの流れがあって、第一流は対馬の南方から本州の沿岸に沿って能登半島に向かい、第二流は韓半島東南部北緯36度線に位置する浦項沖合から隠岐島の北側をすり抜け津軽海峡を目指す。そして第三流は、北緯38度線に近い江陵あたりから、北緯40度線を越え、津軽海峡に入る。(海図参照)



表1 古代韓国語と日本語の関係

古代韓国語 (ハングル)	〈意味〉	〈日本語〉
エ ㅍ	滅	え
ミ ㅍ	水・川	み
ジ/チ ㅍ/ㅍ	人・者	し
エ ㅍ	滅	え蝦
ジ ㅍ	人・者	ぞ夷
エ ㅍ	滅	え
ビ ㅍ	刀	び
ス ㅍ	鉄	す

表2 イ・ヨンヒさんの12の法則

- その1、韓国語の語末音は①消えるか、②独立してもう一つの音になる。
①韓国語:ダブル(다발, da-bal, 束)→日本語:たば(束)
②韓国語:ガム(가, gam, 女神)→日本語:かみ(神)
- その2、韓国語の濁音は日本語の清音になる。
韓国語:ドンモ(동모, dong-mo, 友)→日本語:とも(友)
- その3、韓国語の母音二十一音は五音になる。
韓国語:ウイ(위, wi, 胃)→日本語:い(胃)
- その4、韓国語の子音j音は日本語のs音になる。
韓国語:ジャジャ(자자, ja-ja, さあさあ)→日本語:さあさあ(勧誘語)
- その5、韓国語の子音d・t音は日本語のts・z音になる。
韓国語古音:ドギ(도기, do-gi, 月)→日本語:つき(月)
- その6、韓国語のb・p音は日本語のh・w・a音になる。
韓国語:ボラル(벌, beol, 原)→日本語:はら(原)

この第二流が、他ならぬかつての「新羅アイアン・ロード」であり、第三流が「滅アイアン・ロード」である。江陵から出発してこの第三流に乗れば、津軽海峡を抜け、太平洋を南下して、三陸沿岸に行き着く。しかも、夏から秋にかけて、津軽海峡や北海道の北を流れる宗谷海流と合流する対馬暖流は、毎秒1mを越える黒潮級の「世界最高速海流」であると言う。(北海道大学低温科学研究所の江淵直人教授らによる・2006年3月3日毎日新聞)

黒潮本流は、千葉県房総半島東側北緯35度線あたりから大きく東に曲がり蛇行するので、津軽海峡を通過して南下する船は黒潮に遮られ、自然、関東止まりになる。かくして、東北の「えみし」は誕生した。

「えみし」「えぞ」「えびす」を韓国語で解いてみると・・・

ところで、この「えみし」とは一体何をあらわす言葉なのだろう。

『広辞苑』で調べると、えみしはえぞであり、えぞはえびすであり、えびすは……と堂々巡りの末、「えみしは蛭子」ということになっている。

蛭子は、伊耶那岐神と伊耶那美神の、国生みに際して誕生した初子である。体に障害がある子供だったので、葦の船に乗せて流し捨てたといわれている。その足のたない蛭子が、何故えみしと同一体なのか。

『日本国語大辞典』(小学館)でも探して見よう。

えみし(蝦夷) = 上代、東部日本に住む中央政府に服さなかった部族。「人」の意のアイヌ語emchu, enchu

に由来する語で、アイヌを指すとする説と、特定の異種族ではなく中央政府に服さなかった東部日本の住民を指すとする説がある。

一方『岩手県の歴史』(山川出版社)は、率直に「エミシに「蝦」の字をあてた理由は不明である……」と述べている。

では、えみし・えぞ・えびすを韓国語で解いて見よう。滅はㅍ(ye, ㅍ)と音よみされる。国の名の「滅」であると同時に「大河」「泥水」をもあらわす漢字である。ミは北方系の古代韓国語で「水」「川」のこと。

ジ・チは「人」「者」の意。「王」「貴人」を指す語でもあった。

要するにエミジ(チ)は、「滅水の者」を意味する。エミシは、このエミジ(チ)の転である。(韓国語の濁音は日本語になる過程で清音になる。「李寧熙の変転の法則」その二)(表1、2参照)

製鉄用の砂鉄を採取する川は、浮かび上がる砂で泥水状となる。「滅水の者」つまりエミジ(チ)は、製鉄技術者をあらわす誇り高さ称号であったことになる。

「蝦夷」はあて字だが、これも製鉄・鍛冶とつながる。鍛冶は「磨ぐこと」の意でガと呼ばれた。「磨ぐ(鍛冶をする)東夷」の意を含め、「蝦」とよまれる類字音の漢字で表記されたものと思われる。また「蝦」の訓よみ「えび」は「ㅍ(滅)ㅍ(刀)」につながる。

一方、「えぞ」は「滅の者」の意の「ㅍ」の転だが、「えびす」は「えみし」の転ではない。「ㅍ」は前出「滅」。「ㅍ」もこれまた「刀」。「ㅍ」は「鉄」の意の北方系古代韓国語。「えびす」は「滅の鉄刀」を意味する言葉であることになる。

「えびす」が七福神の一人であるというのも、権力の

(韓国語が日本語に成り代わる法則)

その7、韓国語のo・eo音は日本語のg・k音になる。

韓国語:オ(오, o, 来)→日本語:こ(来)

その8、韓国語の語末音ng音は日本語のu・i音になる。

韓国語:ダンゲ(당, dang, 当・党・唐)→日本語:とう(当・党・唐)

その9、韓国語の語末音l音は日本語のts・ch音になる。

韓国語:ダル(달, dal, 達)→日本語:たつ・たち(達)

その10、韓国語の複合語末音のうち第一音は消え、第二音は独立する。

韓国語:サルム(살ム, salm, 生)→日本語:すむ(棲・住)

その11、韓国語の子音のうちn・m音は日本に来ても変化しない。

韓国語:ノ(노, no, 野)→日本語:の(野)

その12、儀式・技術用語や幼児語は変化しない。

韓国語:ハギヨー(하기요, ha-gi-yo, せよ・始めよ、高句麗言葉)
→日本語:はっさよ(相撲のスタート・サイン)



釜石商業高等学校の虎舞

象徴である鉄刀の所有者だったからであろう。蛭子は、滅系の製鉄王だった。

滅と釜石とのつながりを「虎」から探る

この製鉄部族滅と釜石とのつながりを「虎」から探ってみよう。

幸いにも釜石では、岩手県立釜石商業高等学校の男女生徒30人による虎舞実演(いや熱演)を観覧することができた。釜商虎舞の指導教諭は、歴史専攻の梨子田喬先生。生徒たちをよくまとめている様子が頼もしかった。

虎のしま模様の衣装で身をくんだ二人組が、太鼓と笛・鉦のにぎやかな囃子のリズムの中で、遊び戯れる姿を表現した「遊び虎」、獵師による虎狩りであれば虎をあらわした「跳ね虎」、笹を噛む「笹ばみ」の順で、踊りは激しく展開する。

釜石市がまとめた『全国虎舞考』によると、虎舞は、北は青森県八戸市をはじめとし、南は鹿児島県いちき串木野市(串木野市と市来町が合併・両方に虎舞がある)に至るまで11県27市町村の49団体によって継承されている。このうちの31団体が岩手県南部海岸地帯で行われており、釜石市内だけで14団体。釜石はまさに「虎舞の地」と言えよう。

九州・四国地方の虎舞には、加藤清正や秀吉の朝鮮出兵にまつわる虎退治の話が含まれているという。同じ虎舞でも、太平洋沿岸とは起源が違うことになる。

釜石周辺で行われている虎舞の起源は「不明」だが、いくつかの説がある。

まずその1。江戸時代中期、大阪で流行した近松門左衛門の人形浄瑠璃「国性爺合戦」の虎退治の様子が、三陸の海産物を運んでいた水夫達により伝えられたという説。しかし、なぜ三陸の水夫たちが、人形浄瑠璃の虎退治のシーンを一斉に習って地元へ伝えようとしたのか、説明不能。

「国性爺合戦」は明朝の遺臣鄭芝竜の日本亡命中の子和藤内が、明国の回復を計ることを脚色した人形芝居。確かに17カ月もロングランした人気公演だが、三陸以外にはなぜ虎舞が伝えられなかったか、説明できない。

その2。鎌倉時代、当時三陸沿岸地域を治めていた閑伊頼基(源為朝の三男で源頼朝・義経の従兄弟にあたる人物)が、家来たちの士気を鼓舞するために踊らせたという説。

中国の易経に「雲は龍に従い、風は虎に従う」とあり、また「虎は千里行って千里帰る」とされているので、虎の威を借りて海難をもたらす風を鎮め、海上安全、大漁満作を祈るため虎舞を生み出したというのだが、とすれば、その「有り難い」虎を退治してしまうのは何故か。

その3。三陸一の豪商吉里吉里善兵衛の船が難破して流れ着いた島が和藤内の生誕地で、停泊中に乗組員たちが虎舞を覚え、岩手県下閑伊郡山田町大沢の地元へ伝えた。これが岩手県の虎舞の嚆矢だという。しかし、国姓爺こと藤内は松浦郡平戸(現・長崎県平戸市)の生まれ。九州には熊本・鹿児島に「虎舞」はあるが、平戸にはない。「停泊中に虎舞を覚え国に帰った」という口伝は根拠が薄いことになる。

一体、虎舞はどうして始まったのか。この続きは次号をお楽しみに。